

グラムシと経済学の現代的課題

— 菱山氏のスラッファ/グラムシ論を手掛かりに —

梅 沢 直 樹

I はじめに

グラムシがファシズム政権によって投獄されたさい、ミラノの書店に口座を作って獄中からの本や雑誌の入手に便宜を図り、獄中生活による知力の低下とグラムシが闘うことを支えたのがスラッファであったことは、知る人も多い。この事実が象徴するように、グラムシとスラッファとの間には親密な交流があった。このことは、二人の間に思想的にどこか響き合うところがあり、そのことが両者のそれぞれの領域での業績にも何らかの痕跡を残しているのではないかという推測を呼び起こしても、必ずしも不思議ではないであろう。だが、二人の業績の間にはそうしたつながりは容易には見出しがたい。じっさい、二人の業績にそうした観点から立ち入った検討を加えた研究も少ないようである。それだけに、菱山泉氏の論考「グラムシの思想とスラッファ」²⁾は興味深い。

すなわち、菱山氏は、スラッファの経済学が拠って立つ方法論を鋭く剔抉す

1) たとえば、1970年代のイギリスに、I. スティードマンを中心に、マルクス派と対立しつつ一定の親近性を有してもいたスラッフィアンが台頭したが、彼らもグラムシに関心を示していない。グループのなかには、マルクス派との論争において認識論的=哲学的考察に踏み込んでいるホジソンなどもいたが、彼がのちにまとめた著作のなかでマルクス経済学の特徴を概説している章においても史的唯物論にさえ言及していない。この点、彼らの少しのちに現れ、やはりマルクス経済学の刷新を図ろうとした Analytical Marxism 派が史的唯物論には大きな関心を示しているだけに、眼を引く。G., Hodgson, *Capitalism, Value, Exploitation*, 1982, Martin Robertson, Oxford. Chap. 2, 3 を参照。

2) 『経済評論』に発表されたのち、菱山泉『スラッファ経済学の現代的評価』京都大学学術出版会、1993年、に収録された。以下、スラッファ・モデルの方法論的解釈やウィトゲンシュタイン論を含め、菱山説に関する引用・参照は同書から行う。

るとともに、その方法論の意味をより広い視野の下で掘り下げるべく³⁾、その方法論との関連を基軸にしなが、スラッファと親交のあった二人の興味深い人物、ウィトゲンシュタイン及びグラムシの業績に検討を加えている。もっとも、グラムシ論に関しては、スラッファの方法論との交錯を双方向的に考察するというより、グラムシの業績のうちでスラッファの方法論の観点から関心を引く論点にメスを加えることが中心となっている。さらに、上述のような菱山氏の問題意識からすれば、菱山氏の考察中にも垣間見られるスラッファの方法論とグラムシの社会＝歴史理論との差異をより掘り下げた方が、スラッファの方法論の意味をいっそうくっきりと浮かび上がらせて効果的だったのではないかとも思われる。また、そのように両者の特質を対比的に解明することで、現代において経済学がどのような課題を抱えているのかも浮き彫りになってくるところがありそうである。といっても、筆者がこうした思いを抱いたのも、菱山説がスラッファの方法論を鋭く抉りだしているからであり、またとりわけウィトゲンシュタインとの比較検討のなかで明らかにされているスラッファの方法論の解釈に触発されてのことにはかならない。

のみならず、菱山説は、スラッファの方法論との関連でグラムシの歴史観における「決定論と自由」の問題を検討していくなかで、含蓄深い指摘を行っている。かつ、その指摘はグラムシが「合理性」をきわめて重視していたことへの一定の懐疑に連なると解される。そしてそうであるかぎり、それは現代における経済学にとっての課題にも密接に絡む。というのは、現代における経済学は、人間社会の内部ばかりではなく、人間と自然との関わりにも視野を広げなければならぬが、そこでは理性を好み自然を支配・操作してきた近代人の世界了解の図式そのものがかねてより深く問われてきた。したがって、経済学が従来閑却していた領域に視野を広げようとするのであれば、それは従来どおりの「合理主義」に立脚する経済学でありつづけようのかということ、あらためて反省しなければならないのである。こうして、自由をいかなるものと捉え、だからまた「合理主義」に対していかなるスタンスをとるかということは、現

3) 菱山氏、前掲書、xi ページ参照。

代における経済学のあり方を考えるうえで一定の意味をもつ。しかも、グラムシの思想は、自由や「合理主義」に関してこうした問いを立てるに足るだけの内実をもっている。くわえて、こうした論脈でのグラムシの思想の特質の追求は先に提起した論点とも接合する。すなわち、その追求は、経済学のあり方に関するスラッファの方法論とグラムシの「実践の哲学」との争点自体に鑑みるとすれば、後者の路線の選択が現代的にはグラムシ説そのままに留まりうるか否かを問うことに至ろうというわけである。

そこで本稿では、菱山説を手掛かりに、上述の2点に即して、グラムシの「実践の哲学」は現代における経済学のあり方にとってどのような問題を提起しているのかという論点を中心に、検討を試みてみたいと思う。

II 菱山氏のスラッファ解釈

菱山氏のグラムシ論に立ち入る前に、本節では、その前提としての菱山氏のスラッファ方法論の解釈を確認しておこう。

菱山氏は、ケンブリッジでスラッファと交わした会話を想起しながら、スラッファは個々の企業の費用行動を多様で不確定なもの、一義的で基本的なモデルなど構成しえないものと解していたし、いわんや個々の企業についての一般的なマイクロ行動仮設を基礎にして有意義な経済理論を構築しようとは考えていなかったであろうと推量している。じっさい、スラッファが「生産費用と生産量との関係について」において想定している費用曲線の型も、企業行動の観察から帰納的に導かれたものではなく、むしろ完全競争という仮定に整合的という観点から演繹された、あくまでも「論理的な仮定」だというわけである。さらに、スラッファの主著である『商品による商品の生産』も、客観的な生産技術の体系を礎石としたもの、つまり「個々人の行動を基礎にするのではなく、彼らがどのように行動しようと、そうした行動が究極的には従わざるをえない枠組みを画定しよう」としたものだとされる。そうした意味で、スラッファの経済学体系は、いわば人間不在の見方を取る「方法論的反人間主義」に立っているとみなされる。換言すれば、その立論の核心に「human nature や human

life」を置くことを慣習的方法とする、人間中心的なイギリス経験論——ケインズ経済学もまたその一翼を担っているのだが——とは、「思想の素地を異にしている⁴⁾」というわけである。

このように、菱山氏のスラッファ解釈の基調は、イギリス経験論や行動主義的モデルとの対比において、スラッファの方法論的反人間主義を際立たせたものである。だが、それを基底に置きつつ『商品による商品の生産』の内容を段階を追って分析した氏の立論⁵⁾を見ると、氏のスラッファ解釈は決して単純に方法論的反人間主義のみに塗り込めうるものではなく、むしろずっとニュアンスに富んだものであることがわかる。

すなわち、剰余が産出されない水準の生産においては、諸商品の価格比率は投入—産出の技術体系によって一義的に決定される。また、剰余の発生を考慮しても、賃金が明示的に導入されないなら、諸商品の価格比率を決定するモデルの基礎には「生産技術Tが厳存し、……それが依然として、支配的な影響力をふるい、価値と分配の決定を左右する⁶⁾」と解される。だが、賃金が明示的に導入されると、変数の数が方程式の数を一つ上回ることとなり、体系は自由度1をもつ。そこで、利潤率が外生的に与えられて、体系が完結せしめられることとなる。たしかに、ここでも生産技術Tが「依然として基本的な影響力を発揮する」と評価される。とはいえ、利潤率の外生性は、貨幣当局が利子率をコントロールし、それを介して利潤率に影響をふるうからだと解釈できるとすれば、「あくまで所与の生産技術Tをベースにするものであり、したがって利潤率 r の変域も限定されてはいるが」、その限界内では貨幣当局に一定の行動の自由とそれに伴う経済体系への影響力が認められていることとなる。この段階では、「主体の側の選択行動が価値と分配の決定に与る一定の余地が容認される⁷⁾」わけである。さらに、利潤率が一定の変域を越えて変化すると、生産技術の切

4) 菱山氏、前掲書、168～71ページ参照。

5) 同上書、171ページ以下参照。

6) 同上書、176ページ。

7) 同上書、177～78ページ。

換えという問題が発生する。そしてこの生産方法の切換えは、企業者が利潤率の変化に対処してより小さい費用で生産しうる方法を選択しようとするからこそ起こる。かくして、「いまやわれわれは、生産者ないしは企業者の生産方法の選択が、体系全体の技術Tの変換をもたらす震源になるようなモデルにまで到達した⁸⁾」ということになる。

つまり、『商品による商品の生産』の核心部分に表明されているのはやはり「人間の外に存在論的な基礎をもつような」経済世界の捉え方であるけれども、同書は、その内容を段階的に追ってみると、「テクノロジーを基礎にする決定論的なモデルから、個人の自由選択、自由行動を許容するモデルへと段階ごとに変容していく」体系、「ある意味で、人間不在の見方から人間中心の見方への変容、いやむしろ、そうした一見矛盾する二つの見方の相互作用をば、価値と分配のモデルを対象に、厳密に規定してみようとするものであった」と、解釈されることになるのである⁹⁾。

さらに、菱山氏は、スラッファには、いわゆる自然価格ばかりではなく、市場価格の自然価格への収斂の過程を扱った論文もあること、しかもこの市場均衡過程の分析は「ある意味で行動主義的モデル」であることに止目する¹⁰⁾。「<自然価格>の星座から成る小宇宙と<市場価格>が登場する小宇宙」、換言すれば「人間ないし人間の意志から独立な存在によって動かされる小宇宙と、まさに人間ないし人間の意志によって動かされる小宇宙」とは、架橋されている。スラッファの世界は、全体として見れば、「一つの通路で結ばれた二つの小宇宙」から成り立っているというわけである¹¹⁾。

こうして、菱山氏のスラッファ解釈は、「スラッファ体系はつまるところ自由度のある体系であり、市場価格のレベルにまで下りていくと、人間の自由行動を、ある条件のもとで、かなり大幅に許容しようとする、つまりは人間の内に

8) 同上書, 182ページ。

9) 同上書, 200ページ。

10) 同上書, 183ページ以下参照。

11) 同上書, 209ページ。

その存在論的基礎を求めようとする面を併せもっている」ことを認めたくて、「重要なのは、スラッフアが価値と分配の理論において、人間の外に基礎をもつ領域と人間の内に基礎をもつ領域を厳密に画定し、それら両者の相互作用の形態¹²⁾を定式化してみせたこと」だと総括されることとなっている。

ところで、スラッフアが「人間の外に基礎をもつ領域と人間の内に基礎をもつ領域を厳密に画定」したという主張のうちに、菱山氏は具体的には何を含意させようとしていたのか。それを明らかにしているのが、菱山氏によるスラッフアとウィトゲンシュタインとの連関の考察である。カギは、ウィトゲンシュタインがフィッカー宛の手紙の中で、『論理哲学論考』の序文に入れ得なかった文章を引き合いに出しながら表明している「基本的立場」¹³⁾に見出される。

すなわち、その手紙によれば、ウィトゲンシュタインは、自己の成果を「書いて見せる部分」と「書かなかった部分」の全てから成り立っているとみなしており、かつその書かなかった第二の部分を重視していた。というのも、倫理的なものは、駄弁を弄することによってではなく、「沈黙を守る」ことによって「内側から境界づけ」られるべきもの、「厳密には、ただそのようにしてのみ、境界づけられ得る」ものであり、またそうすることによって「しっかりした場所を与え」ることができると確信されていたからである。要するに、「人はいやしくも語り得るものについては、明瞭に語らねばならず、語り得ぬものについては、沈黙しなければならぬ¹⁴⁾」というわけである。

菱山氏は、「スラッフアの基本的なモチーフ」もまた、「ある意味で、価値と分配の領域を対象にして、語り得るものと語り得ぬものとを厳密に境界づける、つまり画定することであった」と評価する。すなわち、スラッフア・モデルの著しい特色は次の点に、つまり利潤率と賃金という二つの分配変数のいずれかが「外生的」に与えられなければ体系は完結しないことを「明示する」点に、

12) 同上書、200ページ。

13) 菱山氏によれば、以下の『論理哲学論考』についてのウィトゲンシュタインの言明は、ウィトゲンシュタインが終始一貫持ち続けた基本的立場とみなされる。同上書、202ページ参照。

14) 同上書、202ページ。

換言すれば新古典派の限界生産力説などが主張するところとは異なって、分配は「内生的には決定し得ない」ことを「明示する」点にある。このことは、スラッファ・モデルが、現行のすべての分配理論は「本来、語り得ないもの」を「明確な図式によって語り得るものと錯覚している」ことを批判し、「分配ないしその決定については、沈黙を守ることによって、却ってそれに、しっかりした場所を与え得る」と主張していることを示すものにほかならない¹⁵⁾、と。

この点、菱山説にしたがってもう少し敷衍すれば、「分配現象は、さまざまな社会、さまざまな時代に、多様な作用形態(modus operandi)を示すから、それを一義的な行動モデルに定式化することはできない」とスラッファは認識していたし、だからこそ分配現象を自己の基本モデルに内生化することを禁欲したということになる¹⁶⁾。少し異なった論脈において菱山氏がやはりウィトゲンシュタインから援用している巧みな比喩を借りれば、¹⁷⁾『商品による商品の生産』は輪郭のぼやけた「ピンぼけの映像」を意識的に排除したというわけである。しかもここには、スラッファの方法論のもうひとつの重要な特質を認めることができよう。というのは、輪郭のぼやけたピンぼけの映像を排除すべきか否かということとは、スラッファ説においては方法論的反人間主義と関連しているが、一般的には後者と切り離してそれ自体として問われうる。かつ、そうしたものとして、現代における経済学のあり方のひとつの争点たりうるからである。

III ヘゲモニー論の示唆するもの

グラムシの業績中、叙上のようなスラッファ解釈に関わり菱山氏の関心を引いた論点は主に2点である。すなわち、一方で、スラッファが「人間の意志から独立した小宇宙と人間の意志によって動かされる小宇宙とを区別し、これら

15) 同上書、203～04ページ。

16) 同上書、204～05ページ。

17) 菱山説では、ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論とスラッファの市場価格論とを対比するという論脈のなかで、この語が抽出されている。但し、そのさい、「『商品の生産』に定式化されたモデルにも、「ピンぼけの映像」は存在しない」という論及も見出される。同上書、206～07ページ参照。

二つの小宇宙間の相互関係を頭に描いていた」ことに類比的に、「個人個人がコントロールできない歴史的因果法則と、彼らの自由行動ないし選択の余地」の関係、つまり歴史における決定論と人間の自由行動の関係が、グラムシの歴史理論のうちに探られた。¹⁸⁾他方で、スラッファの方法論的反人間主義に関連させて、「グラムシにも、経済体系を反人間主義の観点から把握しようとする一面がある」ことが注目されたのである。¹⁹⁾マキアヴェッリのフォルトゥナとヴィルトゥ論にまで遡って展開される前者の考察も力のこもったものであるが、それについて現代における経済学のあり方という観点から立ち入るためにも、この観点にとってより基礎的と解される後者の論点をまず取り上げてみよう。

さて、菱山氏がグラムシにおける反人間主義として注目しているのは、そのフォーディズム論である。すなわち、フォーディズムは、「労働者のなかに、機械的で自動的な態度を最大限に発展させる」というテーラー・システムの「反人間的な特質」を体現したものであり、グラムシもそれを知性、想像力、創意の発揮といった労働における「人間主義」に対抗するものにほかならないと把握していた。かつ、こうしたフォーディズムについての反人間主義的ヴィジョンは、「産業制度についての独自で、現代的な見方」であり、「スラッファ体系にその典型を見るような生産主導型のモデル、と同じ類型に属しているように見える」。というのは、一般的に言って、フォーディズムは、自動車産業と「投入・産出の網の目によって、直接・間接に緊密に結ばれている、人間の恣意から独立に存在する『体系の独特の生産技術によって決定された、さまざまな部門の間の客観的關係』に外ならないからである」と²⁰⁾。

しかしながら、労働における精神性の切り捨てとしての「反人間主義」と、前節で見たような反行動主義という意味でのスラッファの「方法論的反人間主

18) 菱山氏、前掲書、215～16ページ参照。

19) 同上書、230ページ。

20) 同上書、230～31ページ。なお、D. フォーガチ編、東京グラムシ研究会監修・訳『グラムシ・リーダー』359～60ページをも参照。ちなみに、同書は、投獄前はほぼ年代順に、「獄中ノート」からは大きな主題ごとに、グラムシの基本的論稿を一冊に編んだもので、グラムシ思想をトータルに鳥瞰させてくれる。

義」とは、質を異にした問題であろう。のみならず、上述のところでも両者の媒介環とされているフォーディズム観、すなわち「生産技術的な客観性」としてのフォーディズムという把握もまた、グラムシのフォーディズム論とはむしろ対極にあると解される。菱山説においても、うえに引いた「反人間主義」としての共通性の考察の直後に論及されているところであるが、グラムシにとってのフォーディズムは、「働き生活している日常の人間の特定の生き方、考え方、生活の感覚から切りはなしえないもの」であり、かつそうしたフォーディズム²¹⁾の捉え方にこそ、グラムシの「新鮮で独創的な視座」が認められるからである。つまり、グラムシのフォーディズム論は、人間不在の生産技術的な客観性に見えるものも、じつは独特の人間類型によって支えられてはじめて十全に機能する人間的な側面を内包したものであることを鋭く抉り出そうとしたところに特質をもっている。したがって、方法論的に言えば、反人間主義というより、むしろ人間主義的なものなのである。この点、史的唯物論の展開という、グラムシの業績の固有の領域に即してもう少し敷衍すれば以下²²⁾のようになる。

すなわち、ロシア革命に引き続いて西欧で革命が生じるには至らなかったという現実を見据えながら、グラムシはロシアと西欧との次のような相違に着眼した。「東方では、国家が全てであり、市民社会は原初的でゼラチン状であった」のに対し、西方では「国家が揺らぐとただちに市民社会の堅固な構造が姿を現した」と。つまり、国家と異なり「制裁」や絶対的な「義務」なしに作動するが、「それにもかかわらず集团的圧力を行使し、慣習・思考様式・行動様式・道徳その他を彫琢する」市民社会が発達している西欧においては、経済的破局が生じて、そうした直接の経済的要素だけで革命運動がただちに大きく進展することにはならなくなっているというわけである²³⁾。

21) 菱山氏、前掲書、231～32ページ参照。

22) グラムシ思想の近年までの研究状況については、たとえば川上恵江「グラムシ研究の現状と課題」松田博他編著『グラムシ思想のポリフォニー』法律文化社、1995年、所収、が詳しい。

23) D. フォーガチ、前掲邦訳、239、272、274、279ページなど参照。さらに、編者のフォーガチが「ヘゲモニー・力関係・歴史のプロック」及び「政治術と政治学」の各セクションノ

こうして、グラムシは、歴史の歩みにおける上部構造の役割というものをあらためて見直し、独自のヘゲモニー論を結実させた。すなわち、階級支配というものは、力のみではなく、被支配階級の同意や積極的関与をも支えとするのであって、一定の妥協を伴いながら支配階級の文化的・道徳的・イデオロギー的指導が国民に広範に浸透していくことによって安定化せしめられているというわけである。²⁴⁾ だからまた、革命運動を推し進めるためには、そうした支配階級のヘゲモニーを掘り崩していく日常的な闘争が重要ということにもなるのだが、そのためには、そもそも20世紀資本主義におけるヘゲモニーのあり方や特質が理解されていなければならない。そしてそれが、グラムシのフォーディズム論であり、またアメリカニズム論であった。

フォーディズムについて言えば、それは、合理化が必要とする「労働と生産過程の新しい型に順応した新しい型の人間」の創出の初期段階、「なお高賃金によって追求される新しい産業構造への心理的・肉体的適応の段階」にあるとみなされていたのだが、²⁵⁾ そのさい、新しい型の労働への順応を担保する高賃金は「両刃の剣」だと解されていたことも看過されるべきでない。つまり、高賃金は「勤労者が、豊富な金銭を、自らの筋肉的・神経的効率を壊したり損耗したり」する危険をも内包すると解されていた。だからこそ、「アルコールに対する闘い」が国家の役割になり、また「産業家たち(とくにフォード)が、従業員の性的諸関係や従業員家族の全般的体系化一般に、どれほど関心を抱いてきたか」²⁶⁾ が注目されることになるというわけである。要するに、フォーディズムは、「新

ゝに付した解説(216~17, 266~69ページ)をも参照。

24) 同上邦訳, 220, 223~27, 230~32, 236~37ページなど参照。なお、グラムシのヘゲモニー論をマルクス解釈に関わらせれば、「フォイエルバッハ・テーゼ」に触発されながら、史的唯物論の定式とされる『経済学批判序言』のかの文言の「人間がこの衝突を意識し、それをたたかいぬく」という件を、受動的、機械論的ではなく、能動的、主体的に読み込むところに、その特色をもつ。こうした「実践の哲学」の構築には、イタリア南部での生活体験のほか、クロウチェ説の批判的摂取、卒業論文で取り上げようとしていた言語学的研究なども寄与したとされる。

25) 同上邦訳, 346ページ。

26) 同上邦訳, 350, 361ページ。

しい型の人間」の創出の問題であり、かつその「人間」の質は、新しい労働・生産過程の型への適応の問題であるとともに、その適応のために工場外の私生活のあり方までもが問われ、管理の対象にされるようなものであった。²⁷⁾まさに、経済的・文化的・道徳的総体としての「人間」が問題だったのである。

こうして、グラムシのヘゲモニー論は、第二インターナショナル期に強まった史的唯物論の経済主義的、機械的解釈を乗り越えて、史的唯物論のうちに主体的契機を的確に埋め込んでいく試みであったし、だからまたその一環としてのフォーディズム論も、人間不在の技術的客観的体系としての生産体系の問題ではありえなかったことがわかる。むしろ、一見、人間不在に見えるスラッファの基本モデルさえ、じつはそうした技術に適應しうる人間類型を前提したものであり、かつそうした人間類型は、私生活も含めた市民社会総体のなかで、国家的干渉によっても補完されながら、いわば制度的に創出、再生産されていくものであることを、明らかにしていると言えよう。

だとすれば、グラムシはスラッファ経済学に対して次のような問題を提起していたことになる。すなわち、スラッファ的な「明瞭に語るべきもの」と「沈黙を守るべきもの」との区分は、二重の誤りを犯していないか、と。

まず、グラムシからすれば、スラッファの基本モデルが「人間の外に基礎をもつ領域」を取り扱っているというのは誤解だと解される。あらゆる技術はそれにふさわしい人間類型を前提してはじめて現実的に機能するものであり、かつその人間類型は、上述のように、技術が自動的に生み出すのではなく、むしろ社会的に創出、再生産されるものだからである。のみならず、かのモデルが多様性を排除した「一義的な」領域を対象としているとみなすことにも無理がある。人間の主体性を完全に封じ込めうるのでないかぎり、適応的な型を一応備えた人間をも、いつでもどこでも同じように労働させるとはかぎらないからである。²⁸⁾同一工場が同一時間操業してきてさえ、その時間中に労働者から現

27) グラムシのフォーディズム論のこうした特質を比較的早期に体系的に取り上げたものに、小倉利丸『支配の「経済学」』れんが書房新社、1985年、とりわけ第1章、がある。

28) ちなみに、グラムシは、テイラー主義のもとでも、筋肉や神経の束に機械的な仕事の記ノ

実にどれだけの労働を引き出せるかはときにより異なりうる。それは、決して技術的にのみ確定されるものではないのである。スラッフアの基本モデルに即して言えば、労働を代表するものとして生産体系に導入されるべきは、契約労働時間としてのLではなく、それに労働努力の水準を示す係数を乗じたものであり、かつこの係数は技術的、一義的に決まるものではないということである。²⁹⁾

第二に、特定の間人類型の社会的創出、再生産が前提されていることを踏まえたうえで、そこに現出する生産体系の一定の属性を明らかにすべくかの基本モデルが構成されているとすれば、そうしたモデルの構成自体はそれとして意義を認められる。だが、そうしたばあい、それこそが経済学の核心部分で「語るべきもの」であり、それ以外についてはさしあたり「沈黙を守るべき」ということになる。経済学としてはいかにも不十分であろう。少なくとも、そうしたモデルの前提としての人間類型を再生産している、上部構造的要因を含めたフォーマル、インフォーマルな制度的諸要因にメスを加えないかぎり、対象とする「経済」についての基本的な解明を行ったことにはならないはずである。

こうして、グラムシからすれば、スラッフアの基本モデルは「客観的」で「明瞭に」語りうる関係だけを取り扱っているという認識にも、また経済学の核心部分で「語るべきもの」はかの基本モデルであり、それ以外については「沈黙を守る」ことでその「外在性」を明示するに留めるべきとする判断にも、疑問が投げかけられることとなるわけである。

ところで、菱山氏の労作には、スラッフアとグラムシの経済学的スタンスの相違に関わるもうひとつの興味深い論点が見出される。すなわち、グラムシが

「憶が「宿る」ことで労働者の頭脳は自由を保ち、労働者は作業中にも多くのことを考えるし、決して「調教されたゴリラ」にはおとしめられないとみなしていた。前掲邦訳、365～66ページ参照。

29) こうしたアイデアは、たとえばS. ホールズらによって試みられている。S. マーグリン他編著、磯谷明徳他訳『資本主義の黄金時代』東洋経済新報社、1993年、210ページ以下参照。なお、こうした問題は、1970年代のスラッフイアンとマルクス派との論争においても、マルクス派から提起されている。B. Rowthorn, Neo-Classicism, Neo-Ricardianism, and Marxism, *New Left Review*, 1974, p.82ff. 伊藤誠他編・監訳『欧米マルクス経済学の新展開』東洋経済新報社、102ページ以下参照。

「傾向的法則」を評価し、かつそれをリカードウに負っていると理解していたことに対し、スラッファはきわめてそっけなかったというエピソード³⁰⁾である。菱山氏によれば、スラッファには傾向的法則はマーシャル的な行動主義的方法を想起させたのではないかということであるが、グラムシは経済現象の法則的把握にさいしての「反対に働く力ないし相殺的要因」の顧慮の必要性を念頭に置いていたということであるから、二人の間には傾向的法則を問題とする視角にずれが存在していたことになる。そして、グラムシ的な問題が存在すること自体は事実であるから、スラッファが少なくともそうした問題にあまり関心を示そうとしたとはみえないところに、スラッファには、方法論的人間主義か否かとはべつに、「明瞭さ」自体を求める志向を垣間見ることができそうである。上述の問題に戻れば、制度的諸要因の考察はたしかに明瞭な数理的分析にはならない。そこに、制度的諸要因への取り扱いに対するスラッファとグラムシの相違が生み出されるひとつの要因があったのではないかというわけである。しかし、たとえ明瞭に解ききれない——既述の表現を用いれば、「ピンぼけの映像」にしかならない——としても、上述のように制度的諸要因の考察が経済学の核心的構成要素の一部をなすことは否定しえないであろう。「ピンぼけの映像をはっきりした映像でおきかえることが、いつも都合のいいことなのか。ピンぼけのものこそ、まさにしばしば、われわれの必要とするものではないか³¹⁾」というウィトゲンシュタインの言葉は、経済学の核心部分でもっと評価されてよいのではないか。この点、スラッファのみならず、行動主義的経済学の側にも同じ問題の当てはまるどころがあるだけに、敢えて強調しておきたい。

30) 菱山氏、前掲書、232～33ページ参照。

31) 同上書、206ページ、及びウィトゲンシュタイン、藤本隆志訳『哲学探究』全集第8巻、大修館書店、73～74ページ参照。

32) たとえば、注29)で触れたポールズらの試みは、ラディカル・エコノミックスの立場からのものであり、労働力は意識をもつ商品であるということが焦点であることは理解しているのだが、それでも労働努力の水準を賃金率の増加関数に単純化している。さらに、O.E. ウィリアムソンやD.C. ノースらの「取引費用の経済学」にも同種の欠陥がのぞく点については、磯谷明德「<社会経済システムの制度分析>に向けて」『経済学史学会年報』第34号、1996年、参照。なお、ノースのような目的合理主義的アプローチの狭隘さを示唆したものノ

IV 自由のあり方をめぐって

菱山氏がグラムシ説にメスを加えたもうひとつの論点は、歴史における決定論と人間の自由との関係の問題であった。この考察は、前節冒頭で触れたようにマキアヴェッリ論にまで遡って展開され、グラムシの歴史認識における決定論と人間の自由の問題を次のように把捉している。すなわち、グラムシは、諸個人の価値観が政治過程でいくつかの色に集約されるとみなし、そのように複数の可能性として提示される路線の選択の問題として歴史を捉えていた。さらに、その複数の選択肢のなかで、「歴史的客観的必然性」に照応するというタガをはめられた意志が「合理的な意志」であり、「歴史的必然性を洞察した」少数の人々の合理的な意志が「ヘゲモニーと自由な選択の過程を介して」多数の人人の同意を形成するに至ると想定していたようでもある³³⁾、と。グラムシの歴史理論が史的唯物論の教条主義的な解釈を乗り越え、歴史過程における主体の役割の再評価を試みたものであることを的確に見据えたうえで³⁴⁾、力のこもった考察と言えよう。と同時に、菱山氏は、坂本慶一氏などを引きながら、そうした歴史過程の果てに遠望される世界が「人間と人間の争いは消滅し、個人と社会との矛盾も止揚される」ようなユートピアであることに懸念を表明している³⁵⁾。

第一に、複数の路線を一つの世界観に束ねるヘゲモニーの戦いの過程で、かのユートピア的世界観の創出のためにこそ諸個人の自由の圧殺が正当化されるという事態への懸念である。さらに、そうした懸念の背景として、そもそもかのユートピア構想自体が危うさを孕んでいるのではないか、換言すれば、そもそも諸個人の抱く目的はいつの時代にも多様であり、それらの間に矛盾が存在しなくなるなどと期待するのは不自然ではないかという懸念が表明される。たしかに、こうした人間観からすれば、なんらかの至上の世界観への統一の試み

ゝとして、原洋之介『クリフォード・ギアツの経済学』リポート、1985年も興味深い。

33) 菱山氏、前掲書、218ページ以下参照。

34) 同上書、215ページ。

35) 同上書、226～28ページ参照。

は、必然的に諸個人の自由の圧殺を伴うことになるであろう。しかも、こうした菱山氏の懸念には、人間性についての冷静な洞察とともに、グラムシが「合理性」を過信しすぎていることへの批判をも読み込むことができそうである。人々の価値観は収斂しうるし、歴史は客観的必然性をもってそうしたゴールへと歩んでゆくという歴史観の底流には、何が正しいかは結局「合理的」に決められるという確信が潜んでいるとも解されうるからである。だが、そうした推測が成り立つか否かを確かめるには、そもそもグラムシの言う「合理性」がいかなる性格を持つものであったかについて考察してみる必要がある。

まず、迂遠なようだが、経済学の現代的課題という本稿の主題と、自由のあり方ないし自由概念の内実、さらには合理性論との関連を確認しておこう。第I節で触れたように、現代の経済学は人間の経済的営為と自然環境との関係をも視野に収めなければならない。しかも、そうしたことが求められることになったのは、経済活動の規模が肥大化し、経済活動の基盤としての自然の再生・浄化機能をただ単にいわば無償の恩恵として外生化しておけなくなったからであるとすれば、そうした経済活動の肥大化をもたらした根本要因は何かということが問われざるをえなくなってくる。そうした反省に立ってでなければ、環境問題への経済学的対処といっても、対症療法的処方箋の提示のみに終わることになるからである。そして、この点で問題となるのが、増殖、成長を自らの存立根拠とする資本制経済システムの特性ととも、近代という時代を支えてきた世界の了解図式ということになる。すなわち、近代的思考の枠組みをなしてきたのはデカルトに代表される主体・客体の二分図式であり、そこでは自然はモノとして価値や意味を剥奪されてもっぱら支配、操作の対象とされてきた。その結果、理性によって自然の世界を貫く法則を解明し、それを人間のために利用することが一貫して追求されてきた。そのことが、結局、環境問題を引き起こすほどの経済活動の肥大化の根底にあると解されるわけである。³⁶⁾

36) たとえば、藤原保信『自然観の構造と環境倫理学』御茶の水書房、1991年、D. ペッパ一、柴田和子訳『環境保護の原点を考える』青弓社、1994年、さらに単なる近代批判ではないが、高木仁三郎『いま自然をどうみるか』白水社、1985年をも参照。

この点を自由のあり方に引きつければ、近代的自由は、他在による制約から解放されて、自らの欲するところを実現させることと理解されてきたと言ってもよいであろう。そして環境問題は、理性を待たせようとした自由を追求してきた近代人に警鐘を鳴らすものにはかならないということになる。だが、果して制約からの解放という以外の自由はありえようか。ここで注目されるのが、「制約」というのは純粹に客觀的事象ではなく、むしろ価値判断に関わるという問題である。つまり、自らを取り巻く状況に納得し、受け入れているのであれば、制約に服しているのではない。環境問題に即せば、自然界にも固有の価値を認め、それなりに尊重すべきものと評価しているなら、自然の支配、操作を限定しても、その環境のなかで心のままにくつろいでいられるということである。

合理性論に引きつければ、目的を達成する手段としての有効性、効率性に関わる目的合理性と、そうした合理性を二次的にして何らかの価値を尊重しようとする価値合理性との区別がかねてよくなされてきた。上述の二つの自由のあり方の問題は、これら二つの合理性の区別と重合するところがあると解されるわけである。だとすれば、その所説のなかで「合理性」をきわめて重視してきたグラムシにおける「合理性」は、いかなる性格のものであったのであろうか。

菱山氏が示しているように、グラムシの自由論の基本的枠組は、やはりヘーゲルの系譜を引く「自由と必然の弁証法」であろう。自由とは、恣意ではなく、必然を洞察し、その制約に服しながらそれを利用するところに成り立つものというわけである。と同時に、同じく菱山氏の指摘にあるように、グラムシは「強制が強制であるのは、それを受け入れない人にとってのみ」とも述べていた。ここに、上述の第二の自由のあり方につながる認識も見出せなくはない。だが、

37) 人間中心主義を批判し、動物の権利、さらには無生物の権利を認めようとする運動においては、自然の事物に固有の価値を認めようとする理論も展開されてきている。たとえば、R.F. ナッシュ、松野弘訳『自然の権利』TBSブリタニカ、1993年、参照。

38) 菱山氏、前掲書、225～26ページ参照。

39) 同上書、226ページ。D. フォーガチ、前掲邦訳、510ページ。なお、歴史における決定論と個人の自由との問題としてこうした論点に取り組んだものに、梅本克己の主体性論がある。梅本の史的唯物論理解はグラムシより柔軟さを欠いていたが、「無の哲学」と真摯に切

そう言い切れるかどうかは、何を基準に「受け入れ」るのかという価値判断に依存するところがある。目的合理性を基準に「受け入れ」るのであれば、上述の第二の自由のあり方とは相容れがたい。しかも、それは、「自由と必然の弁証法」とはとくだん相対立するものではないのである。

そこで、グラムシの「合理性」の性格であるが、この点については既に鈴木富久氏が立ち入った⁴⁰⁾考察を展開している。すなわち、まず、グラムシの合理性論は、「理性的であるものこそ現実的であり、現実的であるものこそ理性的である」というヘーゲルの命題を、エンゲルスを媒介にし、なおそれを批判的に継承することで構成されている。したがって、「合理的であるすべてのものは現実的である」という位相と「現実的であるすべてのものは合理的である」という位相との二つの位相を持つ。かつ、後者の「存在するものの合理性」は、より高き合理性の実現を求めて現実の変革をめざす前者の「創造的・変革的合理性」に媒介されて実現しており、逆に前者も、それが現実化し、社会化されてはじめて自らの合理性を実証しようという点で後者に支えられているというように、両者は弁証法的に相互依存しあう円環関係にある。さらに、そうした円環関係のなかで、求められる合理性の基準も、またそれを単なる恣意に終わらせずに歴史的必然となさしめてゆくものも、結局、「人間生活総体の発展を基準とする『真の真に機能的な合理主義』ないし『最大限の功利主義』ということになっている。但し、その実現過程に衝動・情熱、さらに信念・信仰といったいわゆる非合理的要素が介在し、重要な役割を果たすことも認められているが、⁴³⁾と。

じっさい、グラムシのアメリカニズム論やフォーティズム論をみても、一方で「生産の世界で必要不可欠な役割を持たない」数多くの諸階級が存在しない

り結んだその思考は、この論点に関してはグラムシの「実践の哲学」以上に興味深いものを残したと言えよう。たとえば、梅本克己『唯物史観と道徳』こぶし書房、1995年、参照。

40) 鈴木富久「『合理性』概念の二つの位相」松田博編『グラムシを読む』法律文化社、1988年、所収。

41) 同上論文、71～73、84～87、95～96ページなど参照。

42) 同上論文、74、76～78、81、86、92～93、95ページなど参照。

43) 同上論文、82～85ページなど参照。

ことにアメリカの「合理的人口構成」が見出され⁴⁴⁾、他方で「コスト低減をめざす技術革新、労働の合理化」それ自体に対する批判的見地は認められない⁴⁵⁾。さらに、初等教育に関連して、「歴史的にもっとも適したやり方で自然法則を支配すること」に肯定的所見が述べられている⁴⁶⁾、文学批評に関連して、「『合理的な』順応主義」を「有効な結果を得るための最小限の努力」に対応させてもいる⁴⁷⁾。要するに、グラムシには「生産諸力は中立的なもので、それらの発展は明らかに有益なものに思える」という「『生産主義的な』思想的傾向」が認められるし、それに照応して「合理性」は基本的に目的合理的に捉えられていたということである⁴⁸⁾。それゆえまた、その自由論もオーソドックスに近代的なものだったと言える。だが、それは、グラムシの歴史＝社会理論がスラッフアの経済学に投げかけていたはずの問題提起と整合するであろうか。節を改め、現代経済学にとってのグラムシの歴史＝社会理論の意義を総括してみよう。

V 総括

スラッフアの経済学とグラムシの歴史＝社会理論が経済学に求めるはずのものとの争点をスラッフアの側から言えば、経済学の核心部分は客観的で明瞭に語りうる関係で構築し、その他の論点への論及は禁欲することでかえってそれらの多様で、学際的な特性を浮き彫りにするということであつた。いわば沈黙を通して語るという手法である。スラッフアのばあい客観的＝方法論的反人間主義であつたことをひとまず措けば、これは従来の経済学の方法としてさほど珍しいものではない。むしろ、こうした方向で経済学の純粹理論を構築し、その他のものを応用経済学なり、社会学なりに求めていった例は多い。したがって、グラムシの歴史＝社会理論が経済学のあり方に投げかけている問題はかなり普遍的な問題であつたということになる。さらに、一見、人間不在の技術的

44) D. フォーガチ、前掲邦訳、344～45ページ参照。

45) 同上邦訳、352、360ページなど参照。

46) 同上邦訳、389ページ。

47) 同上邦訳、507ページ。

48) 同上邦訳、343ページにおけるフォーガチの解説参照。

関係に見えるものも、じつは社会的に創出、再生産されている特定の型の人間類型によって支えられているということに端的に現れているように、経済事象における人間的=制度的要因の本質的重要性に鑑みるならば、そうした「明瞭に解きえないもの」をも経済学の核心部分に取り入れるというグラムシの方向は十分に考慮に値するものと言えよう。⁴⁹⁾とりわけ、現代の工場やオフィスを支える人間類型の再生産は、グラムシが既に端緒的に洞察していたように、ボードリヤールが言うところの「記号消費」に象徴されるような、工場やオフィス外の私的消費生活を含めた生活全体のなかの事象となっているだけに、こうした方向はいっそう重みを持つと解される。

では、経済学のあり方としてこうした方向を取るということは、もうひとつの大きな現代的課題としての環境問題とどう響き合うことになるのであろうか。

まず、環境問題に経済学的に対処しようとして直面されることは、便益にせよ費用にせよ濃厚に不確実性を帯びているという事態である。生態系は広範かつ複雑に絡み合っており、ある経済的営為の影響が他のそれらと複合して長期間の後にはどのような相乗効果を生み出すかを確実に予測しうるものではない。また、環境問題においては、費用にせよ便益にせよかなり遠い将来に関わることが多いが、それらを比較すべく現在価値に還元するさいの割引率に確固たる根拠が見出されているわけではない。さらに、環境問題に関わる費用や便益にはそもそも貨幣換算が難しいものも少なくないのである。しかも、生態系には閾値という問題、すなわちあるレベルを境に状況が急激に変化するという問題がつきまとうし、そこには不可逆性、すなわちもはや取り返しがつかなくなるという問題も随伴する。だとすれば、不確実な便益や費用を用いて目的合理的な合理性をあくまで追求することは危険であり、むしろいわばピンばけの映像のなかで無理をしない範囲を探求するという知恵が重要となつてこよう。⁵⁰⁾

49) 前掲の磯谷論文が示しているように、制度への関心自体は経済学界全体として高まっており、それをまさに明瞭に解こうとする人々もある。だが、注32)で論及したように、そうした方向にはどうしても狭隘さがつきまとう。

50) 玉野井芳郎の追求した「生命系の経済学」はこの方向を一いささか端的にだが一追求したものと見えよう。

かつ、そうした知恵を働かせることは必ずしも単なる消極的我慢に留まらない。それは、自然界にも固有の価値を認め、それと共生していこうというライフスタイルに通じる。しかも、そうした自然認識は、当然、社会的モラルにも反映し、他者の尊重、他者への優しさや寛容といった精神を育てていくという積極的効果を生むことにもなるのである。⁵¹⁾

かくして、グラムシの歴史＝社会理論が経済学に提起していた、ピンぼけの映像の再評価は、現代的には環境問題を通じ別の角度からも求められていることがわかる。しかしながら、前節でみたところからすれば、同じくピンぼけの映像を再評価するとはいえ、前者が簡単に後者に接合しうるわけでもない。合理性や自由の捉え方に質を異にするところがあるからである。かつ、現代における環境問題の重みを踏まえるかぎり、それは次のことを意味することとなる。すなわち、グラムシの歴史＝社会理論は、その合理性論や自由論の内実に一定の再検討を加えられてはじめて、現代経済学の通常のあるあり方に対する真に貴重な問題提起になることができる、と。経済事象における人間的＝制度的要因への関心が高まっている今日、グラムシの歴史＝社会理論から学ぶことは少なくないと思われるが、そうした関心を軸にした現代的経済学を発展させていくためには、たとえばピンぼけの映像の再評価という論点をも、上述のようなところまでの射程を孕んだものとして捉え返す必要があるということも、グラムシ理論から学ぶべき重要な教訓と解されるというわけである。

51) たとえば、シュレーダー＝フレチェット編、京都生命倫理研究会訳『環境の倫理』上、晃洋書房、1993年、172ページ参照。

The Implication of A. Gramsci's Thought for Modern Political Economy

Naoki Umezawa

Several years ago, professor I. Hishiyama wrote an interesting paper on the relationship between P. Sraffa's economics and A. Gramsci's thought. That paper is quite thought-provoking even now, but I think Hishiyama's view still does not develop completely the implications of Gramsci's thought for modern political economy. I try here to revise it in relation to two points. First, there is the necessity to reevaluate institutional factors which cannot be sufficiently clarified by mathematical analysis. Second, there is the necessity to reconsider the nature of "rationality".